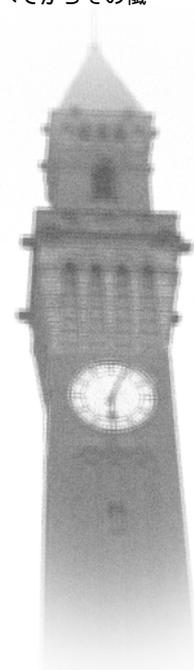


B 棟時計台秘密探偵社

いつもの依頼と変わらないと思っていた。別に頼まれたものを取りに行くだけだったのだから。

開かずの懺悔室。

生徒たちの間ではそう呼ばれているが、そんなものは嘘っぱちだ。その懺悔室が普通に手で開くことぐらい、誰だって知っている。だが、惜しむらくは、もう少し調べてからその懺悔室には入るべきだったかもしれない……。



～オープニング～

聖天翔学園探偵部せいてんしょうがくえんたんていぶと言えば、学園内の問題をいち早く解決する事で有名だ。盗難事件、教師による冤罪事件、いじめや暴力事件……生徒たちの不利益を解決する、それが聖天翔学園探偵部なのだ。

もっとも、当の部員がその活動内容に満足しているかどうかは別の話であるが……。

この日も、探偵部部长である雨切光人あまぎりみつとは渋々と礼拝堂へ向かっていた。

目的の懺悔室を開けるとそこには一人の少女が立っていた。

初等部の子だろうか？

光人は首をかしげた。

少女は光人に気づくと両手をめいっばい広げて、そしてにっこりとうれしそうに笑った。

その笑みは、まるでおもちゃをもらった子供のよう。

そして少女は満面の笑みをたたえながら、光人に向かって言うのだった。

「良く来たね、ポチ。」

はぁ？

あまりの突然の出来事に、光人は首をかしげる。

「今日からわたしがご主人様だよ、ポチ。」

あっけにとられる光人の前でこころと笑う少女は、そう言うと光人の脇をすり抜けて、懺悔室を出て行ってしまふ。

あわてて追いかけるが、少女の姿はどこにもなかった。

残されたのは懺悔室の床に大きく描かれた魔法陣と、そして……光人だけだった。

いつの間にか光人の左手の甲には、床に描かれている魔法陣と同じ文様が描かれていた。



1. タイトル

本作品のタイトルは、ビーとうけいだいひみつたんていしゃ【B棟時計台秘密探偵社】です。

著作、著作権その他の理由から仮称とします。

由来は、主人公が部長を務める探偵部が、舞台となる学園のB棟校舎の時計台の下に部室を構えているからです。

しかし、物語冒頭では普通の探偵部です。

物語が進展し、やがて探偵部の正体が明るみになったとき、【秘密探偵社】としての役目が与えられ、特殊な探偵組織であることが宣言されます。そしてその特殊性が本作のオチへと連続的につながり、物語を終結に誘ういざなことから、この探偵社の名前を題名に冠しました。



3. 訴求ポイント

物事を理解する快感。

企画者はこの快感が大好きで生きているようなものなのですが、昨今は思考を放棄する方向にあり、ゲームにしてもボタン一つでただ進んでゆく、映画なんだかゲームなんだかよく分からない作品が横行しています。



本作品は、双方向小説とでも言うのでしょうか？ 書き手→読み手の一方通行の図式を少し変え、読む楽しさを発見できる作品、しかもそれが自然と行えるように設計された小説なのです。

その解決方法は、【簡単な推理】と【非現実】のクロスオーバーと言うものです。

【簡単な推理】とは一つの事件につきトリックを二つ持たせるもので、読み手が簡単に推理できるトリックと、読み進んで初めて解るトリックを組み合わせたものです。前者が読み手→書き手のベクトルであり、後者が書き手→読み手のベクトルとなります。

これによって、読み手の満足感と、さらに納得感がプラスして、思考することを快感としてとらえることが出来ます。

そして、物語を大きく変化させるために【非現実】を取り入れ、今まで読み手がとらわれていた概念を打ち砕き、大どんでん返しを与えることによって、推理するという立場から物語を追うという小説本来の立場に引き戻して、後半は単純にストーリーを楽しませるようにします。

そうすることによって、読み手は違和感なく思考と物語どちらも楽しむことが出来るのです。

重要なことは、それでいてストーリーは振り返ってみると単純であると言うことです。この作品の目指すところは、読み終わったときに「あー面白かった」と納得できる、その一点につきるのです。



4. 概要

悪魔のペットになってしまった主人公が、その運命から逃れるためにいろいろと悪戦苦闘する話です。

人物配置は、学園で探偵部をやっている主人公、そしてその助手の女の子。主人公のご主人様である悪魔（女の子）と、学園を悪しき力から護っている守護天使（保健医）という感じになります。

しかし、光人は悪魔の存在も信じなければ、ましてやその自分がペットになることなど全く意に介しません。ですが、学園内の様々な事件を解決していくうちに、少しずつ少女の言葉の信憑性が増してきます。

悪魔を名乗る少女の正体。

ペットの意味。

この学園に潜む闇の歴史と探偵部の関わり……。

光人は悪魔から逃れる方法を模索しながらも、次第にこの少女に理解を示すようになってゆきます。そして、少女の本当の正体を知ったとき、ますます光人の心は揺れ動きます。

少女から逃れるべきか、それともこのままでいるべきか。光人は悩みながらも、解決する方法を何とか見つけ出そうと奔走ほんそうするのです。



5. 主要登場人物

雨切 光人【AMAGIRI Mitsuto】

年齢：15歳（高校一年生） 身長：168cm（低め） 血液型：O型

本作の主人公。幼少の頃に読んでシャーロック・ホームズにあこがれ探偵業を夢見ていたが、実際の世の中の探偵は興信所と一緒に、浮気調査などの身辺調査だのという事件とはほど遠い職業だと知りさっさと諦める。

が、入学した学校に探偵部というものがあるのを見つけ、何となく興味を持って行ってみるが、実は探偵部は十数年前にすでに部員が集まらず廃部となっており、名前だけが残っていた事実には愕然とし、青春のスタートを間違えたかなあと思っている。

何はともあれ、帰宅部っちゅーか、暇つぶし部っちゅーか、そんな学校生活を送っていたりいなかったり。

性格は自分に正直で行動派。授業中に思ったことをすぐに口に出してしまって、先生に大目玉を食らうこともしばしば。

頭は決して悪くなく、成績はクラスの中でも上位。

神宮寺 雛子【JINGUJI Hinako】

年齢：15歳（高校一年生） 身長：148cm 血液型：AB型

光人の助手を務める探偵部員。ドジでとろいが一生懸命で一途。

読書家で推理小説が好きで探偵部の扉を叩いたが、部員が光人しかいなくて少しガツカリしている。

いつも部室で本を読んで、光人が部活に出てくるのを待っている。

人の心の状態を色で解くという不思議な能力を持っており、光人の推理に一役買っている。

一条 香帆【ICHIJOH Kaho】

年齢：10歳（小学4年） 身長：131cm 血液型：B型

突如光人の前に現れた少女。

光人のご主人様だと言い張る、悪魔。

性格は気まぐれで、ちょっとワガママ。けれど、光人のことはいろいろ思ったりしているようで、何かと気を回す可愛いところも。

エンディングでは光人と同齡（15歳）で登場。



熾永 豊【OKINAGA Yutaka】

容姿年齢：22歳 身長：172cm 血液型：不明

保健室の妖艶と男子生徒の間では名高い保健の先生。モデルのようなすらりとした身体にストレートの長い髪、何か薄幸な印象を受ける白い肌、そしてまるで絵に描いたような整った顔。優しく母性的でそれだけでちょっと暗い過去もあるようで、保健室に人生相談と称して、誰かしら男子生徒がいるとか。

その実は、この学園を見守る守護天使様。



6. 世界観

4-1. 背景世界

物語の舞台となる本作で扱われる^{しおさき みどおり}汐碇市美通区は政令指定都市の一区で、横浜をモデルにヨーロッパの下町の香りを濃くしたオリジナルの世界と



なっています。

入り組んだ路地、石畳の小路、坂道、レンガ造りの建物と橋、その下を流れる運河、煉瓦倉庫、港、外人墓地と風情ある景色が広がる一方、海沿いから駅に向かっては、高速道路、高層ビル、複合型のショッピング・モールが立ち並んでいます。

学校は歴史あるキリスト教系のミッション・スクールで、洋館のような本部棟、時計塔、分厚いレンガ造りの校舎、田園のような中庭、礼拝堂、古い図書館など、明治時代の建物がそのまま残っています。

明治始まって間もない頃、アメリカからやってきた宣教師が建てた学校で、その当時はその宣教師の名前が付いていたのですが、天使が舞い降りたという伝説があり、それから聖天翔学園と名前が変わったとされています。

探偵部は主人公が所属する部で、学園内でももっとも歴史ある部の一つです。十数年前に部員が集まらずに、なし崩し的に廃部となったのですが、登録は抹消されず、部室もそのまま残っています。

4-2.魔法の实在

そしてこの世界は魔法が存在していることになっています。

この世界では魔法にも理^{ことわり}があり、それを行使するための準備、触媒、呪文が必要であると定義します。つまり、魔法も科学と同じように実現するためには手順と道具と仕掛けが必要なのです。

そしてそれは【秘密探偵社】という名前と密接に関わりがあります。

実はこの探偵社、学内で起きた超常現象、特に魔法の類^{たぐい}の事件を解決するために組織された、魔術師集団だったのです。幕末～明治初期にかけて産業革命から逃げるように欧米から持ち込まれた魔法は、日本が列強の仲間入りをするまでの末^{つが}の間、この天翔学園でも使われていたのです。

しかし皮肉にも探偵社の活躍により魔法の悪用を抑え、また、効率重視の科学が波及するに従い、魔法そのものが衰え、探偵社としての仕事も少しずつなくなり、やがてそのような知識を持つ先生も生徒もいなくなり、名前だけの探偵部となってしまっていたのです。

そして魔法はおとぎ話だけの伝説となってしまいました。



7. あらすじ

悪魔のペット宣言を受けた光人^{みつと}は、そんなことはお構いなしに学園生活を送ります。しかし、自分の寮にまで押しかけてくる香帆^{かほ}。

今までの生活が大きく変わってしまいます。

そんな折、密室の盗難事件が発生します。先生たち必死の捜索にもかかわらず、ついに発見されず、事件は探偵部に持ち込まれます。

光人は被害者から話を聞きながら、一つ、一つと手がかりを見つけ、事件を解決します。

更衣室から盗まれた下着、消えた通信簿、光人にとっては、いずれも他愛もない事件でした。犯人はストーカーまがいの生徒、親友の成績をねたむ生徒。ただ、一つだけ光人は気になることがありました。これらの事件



は、学園七不思議の舞台のどれかが必ず絡んでいるのです。

開かずの懺悔室に入っていた下着、誰もいないのに足音のする階段から持ち出された通信簿。

そしてついに事件は、生徒の失踪事件にまで発展していきます。

図書室で消息を絶った、生徒。

ここまで来たら警察の出番だろう。光人はそう思っていました、気になることもありましたが。図書室も学園七不思議の舞台の一つなのです。学園が創設してから存在している古書があり、その本を借りると死が訪れるというものでした。

ばからしいと思いつつも、光人は七不思議について生徒やまたOBの残した資料をあさります。すると、その図書館の話には続きがあることも解りました。なんでも本を借りた生徒が死ぬと、本から血がにじみ出るのだと。

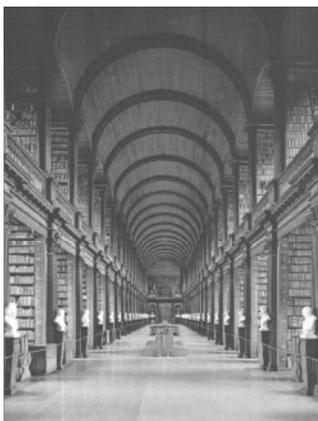
光人は片っ端から図書室の本を搜索し、血のにじんでいる本を見つけます。恐る恐るその本を開くと、十字架に付けられて血を流している挿絵の中に、行方不明とおぼしき生徒の姿がありました。

でもこんな話をしても誰も信じてもらえない。そう思った光人は己の死を覚悟で本の解明にあたります。そして、目く付きの本は一冊だけではないことを突き止め、これらの本は学園創設時に納品されたことを知ります。そしてこれらの本の貸し出しカードには必ず【B棟時計台秘密探偵社】という文字がありました。B棟時計台の真下にある部屋は一つしかありません。そう、光人が使っている探偵部部屋です。

そして光人はついに部屋に隠し部屋を見つけ、その隠し部屋に納められた膨大な資料を目の当たりにします。この学園を見えない力から護るために存在し続けた秘密探偵社の存在と、歴史を。学園七不思議とは、秘密探偵社が一つ一つ封印してきた戦いの跡だったのです。

では、どうしてその封印が解けてしまったのか？ その原因は、^{カハ}香帆にありました。悪魔である香帆が、この学園内に踏み込むことによって、今まで押さえつけられていた様々な^{ちみもろりょう}魑魅魍魎が復活してしまったのです。

光人は超常現象を目の当たりにし、そして本に閉じこめられた生徒を自らの手で救うことによって、香帆がまた本当の悪魔であることをここで初めて自覚するのです。



～エンディング～

悪魔である少女は、かつての光人の幼馴染みでした。

光人が幼い頃、ケガで入院していた部屋にいた、大病を患っていた少女だったのです。

少女はその後、命を落とした……と、光人は親から聞いていました。

その少女は光人のことが好きでした。

自分の想いを伝えたい。

その強い思いを現実へと変えるために彼女は悪魔と契約をしてしまい、自ら悪魔となり、光人と両思いになるのではなく、光人を所有することになってしまったのです。

それに、悪魔に与えられた期間は一年（期間は結構テキトーかも）。

この一年のうちに光人をペットとし、そして最終的に光人の魂をも悪魔に捧げなければならなかったのです。ですが少女はそんな気はありません。少女は光人と共にいるだけで、幸せでした。

一年たてば、自分が消えればいい。

少女はそう思っていたのです。

この呪縛を解き放つには、最強呪文「なかった事にする」しかありません。

しかしそんな超高等魔法は今まで誰も使ったこともなければ、そもそも人間がそんな大それた事を出来るはずもない。

けれど光人はその方法を模索し、学園中をかけずり回ります。

そしてついに、いつもアドバイスをしてくれる保健医がこの学校の守護天使である事を突き止め、少女の運命を変えてもらうように頼みます。

しかし天使は悲しそうな目をして言います。

少女を助ければ、少女も、そして光人もお互いのことを忘れてしまうだろう、と。

そう、少女を大病から救うと言うことは、病院での光人の出会いもなくなってしまうのです。

「それでもかまわない。」

光人は少女のために思い、はっきりとそう言い放ちます。

しかし少女は首をめいっばい横に振ります。

「光人と会えないなら、今のままがいい!!」

天使は優しく笑うと、自分の持っていた赤いリボンを二人の小指に結びました。

「赤い糸は、いつか二人を引き合わせる。時が変わっても、場所がどんなに離れていても。」

そう言って天使は、そっと二人の手を握りました。

たったそれだけ。

気がつくと、少女は消え、またそのことも光人は覚えていません。

手の甲にあった魔法陣はいつの間にか消えていました。

「あれ、先生、何、俺の手を握ってるんですか?」

照れる光人。

保健医はそっと光人から手を離すと、授業に戻るように言います。

ある日の登校風景。

風で一本のリボンが飛ばされてきます。

そのリボンを追いかけてくる女の子。

光人はリボンを拾うと、女の子に手渡します。

「ありがとう。」

女の子はにっこりと笑います。

「いや、別に……」

素っ気ない光人の返事。

女の子はべこりとお辞儀をして行ってしまいました。

けれど、光人は拾ったリボンが、記憶の底に引っかかります。

「あ……」

光人がポケットをまさぐると、そこには同じリボンがありました。

「待って!」

このリボンのつながる先は……

光人は無意識に駆け出していました。

翌日……二人しかいなかった聖天翔学園B棟時計台秘密探偵社に、部員が一人。

これから恋をすればいい……と、天使はニッコリと微笑んだのでした。

